

富士通の2年間

1991年の3月1日から1993年3月31日までの2年間、私は富士通に入りました。

この間わが家には重大な変化が生じました。長男、維作（イッサク）が1992年4月28日に生まれたのでした。まだ我々が駒込に住んでいた時でした。「維」という字は、簡単に言えば「システム」という意味なので、「我々の世界に新しいシステムをもたらす人」になって欲しいという希望を託して名付けました。彼はほとんど教科書どおりすくすくと成長しました。しかし、我々が千葉市に引っ越した頃、突発性発疹で、3日間40度を超す高熱が出た時は、我々2人は、交代で寝ずに看病するほどたいへんでした。さらに悪いことに、近くにまったく良い病院がありませんでした。このときの経験が我々が、富士通にはあまり永いはいできないと感じた最初だったかもしれません。



私は富士通の計算科学研究部で研究しました。この研究部は、私が入ることによって新しくできた部でした。この2年間で私は9ほどの研究論文を公表しました。それらの論文の中でいくつか数学と物理学の新しい重要な結び付きを発見しました。さらにユタ大学で行ったPh. D.の研究の自然な拡張となるものを実現することができました。この研究部は、私が入った初期は蒲田にあるビルの一部屋のフロアの一部を占めるにすぎませんでしたが、今はそのころよりずっと大きくなり、幕張のビルの一部屋を占める計算科学研究センターと成長しています。人数も10数人から数十人へと増えました。しかし、私がいた2年の間のあまりに早い大規模化と、それにもなって生じる官僚機構的な風潮が私は好きになれず、他へ移る道を探しました。事実ここで研究を続けるには、肉体的にも精神的にもかなり苦痛をとまなうことでした。私に与えられたのは小さな事務机1つとその上のコンピューター1台しかなく、周りには何百人もの他の人達が作業しているという状態でした。そのため、毎日図書室の狭い図書机で研究するというありさまでした。



富士通から理研へ

あるとき、日経サイエンスの記事をコピーして自宅で読んでいたら、カコが科学技術庁の研究者募集の広告に気付きました。そこへ問い合わせると、30歳未満という年齢制限により私は無理だということがわかりました。しかし、その時の担当員が、[理化学研究所](#)には似た基礎科学特別研究者制度というものがあると教えてくれたのでした。私はさっそくこれに応募しました。幸い私は35歳未満という規定より1歳年齢がオーバーしていたにもかかわらず、書類審査と面接にパスし、理研に行くことが可能となりました。私は富士通を辞める決心をし、1993年3月31日をもって、富士通を離れて、理研に移りました。これは私たちにできた最良の決断でした。

[もっと前](#) [もっと後](#)

[ホームページ](#) [和基](#) [和子](#) [維作](#) [奈蒔](#) [家族](#) [Donation](#)

「井口和基博士と家族のホームページ」
〒774-0003 徳島県阿南市畷町新はり70-3
井口和基 (C)2004